

## シンポジウム 大規模水害に地域で備える 記録



## 1. 開会の前に（総合司会：渡邊喜代美）

### 総合司会）

開催前にお手元の資料のご説明をさせていただきます。袋の中には、葛飾区が発行しました荒川洪水ハザードマップがはいっています。すでに各ご家庭に配布されているものです。もう一つは、今日の主催者の一人でもある NPO ア！安全・快適街づくりの紹介パンフレットと街づくりニュースです。

街づくりニュースは、ゴムボートの乗船下船の体験イベント、2年間の新小岩地区のワークショップの歩みなどが掲載されています。参加されていない方にもわかりやすい内容となっています。

それでは、これから、16時30分まで「大規模水害に地域で備える」～広域ゼロメートル市街地における地域住民の取り組み～というタイトルでシンポジウムを行います。少し長い時間ですが、皆さんと一緒に進めてまいりたいと思います。



今日の主催は、NPO ア！安全・快適街づくり、広域ゼロメートル市街地研究会、葛飾区新小岩地域北地区連合町会、後援は、葛飾区、江戸川区、国土交通省の荒川下流河川事務所、NPO 都市計画家協会です。それから、シンポジウムをさまざまな形で、協力しているのが、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻都市情報・安全システム研究室の皆さんです。

それでは、第1部に入りたいと思います。まず、NPO 法人ア！安全・快適街づくりの石川理事長に開会の挨拶をお願いいたします。

## 2. 開会挨拶：NPO「ア！安全・快適街づくり」石川金治

### 石川)

皆さん、お集まりいただきましてありがとうございます。主催者を代表いたしまして開会の挨拶をさせていただきます。頭に NPO と書いてありますが、これは非営利団体、要するにお金儲けをしない団体ということで、町会の方々と5年ほど活動を続けております。その理事長をやっている石川でございます。どうぞよろしく。今お話がありましたように、ハザードマップをお手元にお持ちですよね。これは、



大変大きな洪水を想定しています。だから、一生に一度経験するかしないか、そういう台風を対象にしています。めったに起こらないからということで、皆さん忘れてしまう、軽んじてしまう事があるのですが、小さな水害、たとえばガード下が通れなくなるような経験はされていると思います。これは、交通安全と同じです。小さな事故は経験されていますが、生きるか死ぬかというような事故にあうというのは、皆様方もここにいる人ほとんどあっていないのではないかと思います。だけど、交通安全を考えない方はいらっしやらない。交通事故に合わないように、と毎日考えていらっしやると思います。それと同じで水害もめったに起こらないですけれど、気にしていると気にしていないでは大きく違う。それから、火災保険。あわせて水害保険に入っている方も大勢いると思いますが、掛け捨てになるのをわかっていても入るじゃないですか。あれはお金がもらえるんですね、水害になると。だけど、その前に水害で命がなくなっていたら、せっかくかけたお金は役に立たないじゃないですか。だから、そうゆう面でも、是非、いつも水害について考えていただくことが、良いのだと思っています。

で、前置きはこのぐらいにして、この地図に出ているのはゼロメートル地域で葛飾区版です。なので、葛飾区以外の方は、自分の所の水位がどの位かということは、この地図からはわからないのですが、ゼ

ロメーター地帯というのは、大体イメージとしては同じなので、そういう風に考えて、後のアンケートはお答えいただければと思っています。ゼロメーター地帯というのは、輪中堤で囲まれてそして、住めるようになっている。堤防が無かったら、皆さんが住んでいる所は、魚がすむところです。普段、魚がすんでいる所に住んでいる。だから、もう一箇所でも切れたら、2階とか3階にいないと生活できないと、そういうところに住んでいるのです。そして一回水が入ってしまうと、10日とか20日とか堤防を復旧してくれない限り、毎日毎日みんなの所に水が入ってくるんですよ。だから、もんもんとしていなければいけない。山の手台地の人は、一夜明ければ水がなくなっちゃうのね。だから明日から復興作業に入れる。この辺の人は、それが出来ない。20日ぐらい待っていなければならぬ。そういうことは、学問的には疑う余地はないのだけれども、なかなか誰も親身になって、考えてくれる人がいない。だから、皆様方が自分で考えなければいけない。考えるのは、保険と違ってお金がかかりませんからね、時間だけかけていただければ言い訳です。だから今日はその時間にしてもらいたいなど。なぜ、みんな、親身になって考えてくれないかという事ですけど、もともとこの辺りはそんなに低い土地じゃなかったんです。たぶん皆さん方が子供のころこの辺りは田んぼがいっぱいあったのですよね。稲はね。塩水嫌いなもの、だから塩水が入っていたら稲が出来ないんですよ。地盤が下がって塩水が入ってきて稲作ができなくなったころ、ちょうどこの辺りはね、住宅として土地を利用することができるようになってきたの。だから稲作が出来なくても、盛土して下水が整備されれば、お百姓でやっている以上に収入があるものだから誰も文句は言わなかった、むしろ、下水を早くやってよ、やってよと、こういう意見が強かった。だから下水は一生懸命やりました。今は、100%です。次は、そろそろ自分の命を大切にしていよと、こういう声を上げてもいいころかなと思っています。この話をすると、そんなこといったって、いい案だしたって、どうせ誰も取り上げてくれないよ、とおっしゃるんです。私達 NPO は、プロフィールの中に書いておきましたが、常に一人では何にも出来ないの。だけどその人が始めなかったら、何にも始まらないよと、これがうちの NPO の原点なんですよ。で、一つ事例を申し上げますと、水位標示板、といいまして、皆様方のおうちは、過去の水害でこちら辺まで水が来たよというのがね、分かるように出してもらったんです。これね、現役の頃、そういうのをやろうよといったら、イメージが悪くなるからやめてよ、地価が下がっちゃうからやめてよ、という事で出来なかった。今度の NPO は、力は無いんです、行政と違いますから、だけど親身になって町会とお話ができるのね。親身になってお話をしたら、じゃー試しにやってみるか、という事で、8本だけ立てるのを認めていただいたのね。それで、8本立てたらね、隣の町会がうちの所もやってもうらおうかな、とこんな意見が出てきた。最終的には、葛飾区さんがとりあげてくれて、今、200本近くあるのね。こういうふうにならね、いいだしっぺがいればだんだんと実ってくるのだらうと、今日は、是非皆さんがいろんな意味のいいだしっぺになって頂く事を祈願してこのシンポジウムを開きましたので、一つよろしく願いいたします。

### 3. 本シンポジウムの趣旨説明：東京大学 加藤孝明

加藤)

皆さん、こんにちは。雨の中、どうもありがとうございます。東京大学の加藤と申します。実は、私もゼロメートル地帯の生まれ・育ちです。濃尾平野の完全なゼロメートル地帯の育ちです。今振り返れば、水位標示板の話があったことが思い出されます。子供の頃、町役場に行くと、去年の海面水位が電柱に張ってありました。今年海面という、もっと高い、背の届かないような場所に張ってあったのを記憶しております。子供心ながら「こんな場所に住んでいるのか」という強い印象を持った記憶があ

ります。この4年間、先ほどの石川さんに誘われて「広域ゼロメートル市街地」と呼ばれる、こういった下町地域の研究に携わらせていただいております。

それでは、今日のシンポジウムの趣旨説明を簡単にさせていただきたいと思ます。今回のシンポジウムのサブタイトルにもあります「広域ゼロメートル市街地」。これはまだ一般的な言葉ではありません。どうゆうものかという、水面下の、「お魚さんと一緒に暮らしている」という水面下のゼロメートル地帯で、それだけではなく、高密度で、広域な市街地がそこに形成されている市街地のことを言います。こういう市街地のことを「広域ゼロメートル市街地」と呼んでいます。ゼロメートル地帯は、世界各国いろんな所にありますが、広域ゼロメートル市街地は、世界を見ても、実はそんなにたくさんありません。日本で言うと、濃尾平野、つまり、名古屋、大阪、それから東京。3年前のアメリカのハリケーンカトリーナでは大被害起きました。ああゆうところは、確かにゼロメートル地帯ではあったのですが、人口密度でいうとこの地域の1/10から1/20ぐらいに過ぎない。そういう意味では、高密度ではありません。

広域ゼロメートル市街地の地域の安全性をどう高めていくべきか、という研究と、皆さんと一緒にやってきた取り組みが、ここ数年間の活動内容です。そして今後、広域ゼロメートル市街地という言葉が日本全国に、さらには世界に広がればいいかな、そして問題意識が共有されればいいかなとそうゆうふうに思っています。この2年間、新小岩北地区の住民の方、そして我々専門家集団、NPOと一緒に取り組んでまいりました。企画自体は、我々専門家集団とNPOがやってきましたが、実際は町会の方々が主体的に議論をどんどん積み上げていったというのがこの2年間の活動内容になります。活動内容については、この後、詳しく説明させていただきますが、ワークショップ（WS）といわれる少人数での討議方式を使いつつ、その場で座って人の話を聞いて学習したり、少人数で議論して対策を検討したり、また外に出ていろいろな体験をしたりしながら、水害の危険性について理解し、そしてその対策についてみんなで一緒に考えてきました。

今回このシンポジウムの位置づけは、三つあります。一つは、この二年間の活動、新小岩地区での活動の総括をしようということ。そして、二つ目は、これまでの取り組みに参加されてきた方、つまり町会の方々が、連合町会の中の参加していない人たちへ、是非活動内容を報告するという。そして三つ目。広域ゼロメートル市街地というのは、新小岩北地区だけの問題ではありません。隣の地区、そしてさらに隣の地区も、葛飾・江戸川・足立全域が広域ゼロメートル市街地です。一回水が出てしまえば全域使ってしまいますので、言ってみれば「運命共同体」です。この「運命共同体」の方々と問題意識をきちんと共有したいということが三つ目です。今日は新小岩北地区以外の方も大勢いらっしゃっていると思います。こういった位置づけで、最終的にシンポジウム終了後、「確かに今後何かをしていかなければいけないな」という気持ちになっていただけると、このシンポジウムとしては成功かな、と考えています。



#### 総合司会)

今日のシンポジウム、あるいは研究活動やワークショップ、いろんなことをこの2年間で積み上げてきました。紹介しますと、新小岩北地区の連合町会、そこにはいろんな町会があるわけです。西新小岩三丁目町会、西新小岩四丁目町会、西新小岩五丁目町会、上小松町会、東新小岩五丁目町会、東新小岩

七丁目町会、東新小岩八丁目町会、これだけ沢山の町会の皆さんが、今回の研究活動に参加して、今日のシンポジウムを開くにもご尽力いただいております。それから、NPOの方は、石川理事長、宇賀事務局長、徳倉副理事長、地域の方との連絡調整役の高田さん、増澤さんなど、今日も沢山のメンバーが会場にきて活動しているんです。それから先ほど加藤さんから紹介があった広域ゼロメートル市街地研究会のメンバーも最強の協力者で、これは研究チームとして活動しているんです。研究会のメンバーは今日、加藤さんは研究発表、土肥さんは今日のシンポジウムの進行役をします。それから私、渡邊は総合進行役、市古さんはいま撮影係をしております、中村さんは今日の開場整理を一気に引き受けて下さいました。菅田さんも今撮影をしています。廣井さんはテレビの方の対応、鴨川さん葛飾区の住民でもあるので今日はパネリストでございます。ヤルコンさんはアンケートなどの集計を盛んに手伝ってくれ専門家、塩崎さんは学生ですが加藤さんの力強い手元となって働いてくれました。こんな多様なメンバーが沢山集まって、やっと今日の報告会になっているという風にご理解いただければ大変うれしいです。

それではここで、来賓の挨拶を頂きます。

今日は葛飾区収入役の青木様がいらしてくださっています。青木様よろしくお願いたします。

#### 4. 来賓挨拶

青木様)

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました区役所の収入役の青木でございます。こうした会にも、何度か参加をしながら、私達も一生懸命勉強させていただいている所でございます。少しお話させていただきますと、葛飾区は本当に水害には、悩まされた区でございます。昭和22年9月に、カスリーン台風、先ほど話ができましたけれども、その時ことを覚えていらっしゃる方もいるかもしれませんが、葛飾全体が水没をしたわけでございます。一番深かった所で、新宿あたりが3.2mといますから、もう一階部分は完全に水没をするような状況があったわけです。そして52,700ですか、の家が床上浸水ということで考えられない状況になったわけでございます。そして何日も水が引かない状態があったというような事でございます。しかしその後、堤防も整備されるなど、いろんな状況もあってですね、その後、大きな水害はございません。200年に1度といった水害は無いわけですが、さっきちょっとお話がありましたように、低い所に水がたまる、つまり区内には、水路が沢山ありましたので、そこから溢れてですね、ちょっと雨が降ると水が溢れてそこに水がたまる、床上浸水もいわゆる床下浸水も発生する状況が年に何回もありました。昭和50年代の終わりごろまではそんな状態がずっと続いておまして、私もその当時から役所に降りましたので、何かあると、土嚢を、その家に積んでまわって、土嚢を積んでもたいした効果は無いんですけども、ま、一生懸命積んで、役所が一生懸命やっているよ、という感じで、やってきました。その後、石川先生の話にもありましたように、下水が完備されたということで、下水が100%になりますと、内水といって中に溢れてでるような水害ってというのは殆どなくなって、今はもう殆ど水害がないなという感じに皆さんお思いだと思います。しかし、今いろいろとお話を伺いましたように、相変わらず200年に一度とか100年に一度という水害の危機というのは、常に存在するわけでございます。葛飾区でもそれをほったらかしというわけではないんですけども、荒川は国の一級河川ですし、それから中川は東京都が管理している部分と国が管理している部分でございます。それらについてですね、堤防の強化、まずは堤防が切れるという事が一番大きな水害の元でございます。今、話がありましたように、荒川ハザードマップも荒川が切れた事を想定し



ているものでございますので、そういったことが無いように、まず堤防を強化する事については、少しずつ一步一步ですけれども、区も国も都も協力をしながら整備を進めている所でございます。今月も、江東治水との話し合いがあったんですけれども、この中川の部分について、ずいぶん前に、中川会長はじめいろんな方が NHK に出て、いろんな働きかけした事もありまして、東京都と我々も協議をして、10 年間かけて中川の七曲の部分ですね、上平井橋のところから高砂橋まで 10 年かけて整備をしようという事が前倒しで決まりました、去年から工事が始まっています。これによって杭はいままで何倍も深く打って、堤防が壊れないようにするというような、見た所何をやっているのか良くわからない工事ですけれども、一步一步着実に進んでいきます。また、昨日はですね、江戸川の河川事務所の方とも協議をしたんですけれども、江戸川の方も堤防が決壊されないように、堤防の一部をきちんと固めるような工事だとか、そういうことについても、どんどん進めている状況です。だから絶対安全ということではありませんけれども、従来よりも強い堤防、また弱い箇所は強化をしていくという事は日々、いろんな形で進めているというということがございます。しかしですね、さっきニューオリンズの話もちょっとでましたけれども、ついこの所でミャンマーですね、ミャンマーで大水害があったわけです。200 年とも 500 年に一度と言われますけれども、そういった大きな水害が来るということは考えなければいけないのかなとは思いますが。このハザードマップも、葛飾区で作りましたけれども、200 年に一度ぐらい荒川が切れたらこんな状態になりますよと、しかしそのときはどうしましょう。どうしようもないということではなくて、やっぱり昭和 22 年の時のカスリーン台風の時のように、水没しちゃうわけですから、その時に避難の程度や内容によって 3 階建て以上の方はご自分の家で、上にあがってくださいとか、それ以外の方は学校のような高い建物の所に、ここに書いてありますけれども避難をしてくださいという事を書いてあるわけでございます。さらにですね、避難場所の確保だとか、それから避難する高台を作ろう、だとかいろんな意見が皆さんからもお聞かせいただいておりますけれども、やはり住民の方がきちんと認識をしてですね、いざとなった時にですね、TV 見た時に大変なことになったとあわてて、そこらへんを走り回ったからといって解決する問題じゃないので、皆さんに良く知っていただいて、その時にどう対応していくかという事をご検討いただいたり、じゃその時に区として何ができるかという事を区と相談いただいたり、NPO の皆さんと相談しながら何かを考えていくと、これがすごく大事な事かなと思っております。で、今この中で、北町連、中川さん鈴木さんお見えです。岩城さんとかこの新小岩地区の方も皆さんお見えですし、北側の方の東立石の方の大田さん、堀越さん、村田さんといった会長さんたち皆さんお見えになってですね、一緒に聞こうという事でやっていただいておりますので、是非皆さんで活発な意見交換をしながら、区の職員に聞かせてほしい、聞かせていただいて、国や東京都に伝えてですね、より安全なまちをつくるという事も大前提ですけれどもいざという時には、どうやって皆さんがけが人を出さない、死者を出さないで避難が出来るかということも非常に大事な事ですので、是非そういったことについてですね、皆さんと協力しながら我々もこれから努力していきたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。ありがとうございました。



総合司会)

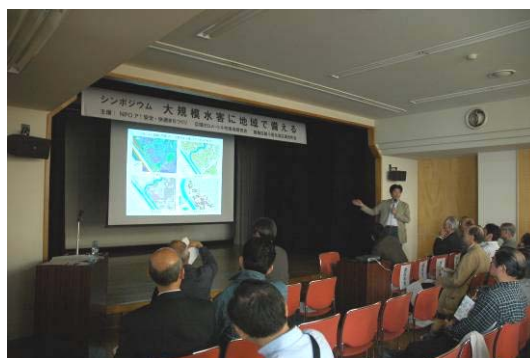
ありがとうございました。

次は、加藤さんから2年間の取り組みとワークショップなどの経過ご報告をさせていただきます。画面で報告を見ていただきながらお話しします。よろしくお願いいたします。

## 5. この二年間の取り組み、ワークショップの報告：加藤孝明

加藤)

プログラムでは2年間の取り組みを私、その後町会からのワークショップの報告とありますが、私からまとめて全部お話させていただきます。今から20分くらいお付き合い下さい。(以下、省略。巻頭資料を参照のこと)



総合司会)

ありがとうございました。今の報告は、皆様のお手元にあるやや厚め資料の中にすべての事が入っております。加藤さんが少し補足的に説明しましたが、この中に入っておりますので、お時間があるときにまたみていただくにとってもよいと思います。

さて、これで一部の予定のテーマは終わる事ができました。2部はますます面白く、地域の方も合わせて壇上にでていただいて、トークセッションに入ろうと思います。これから10分ぐらいのお手洗い休憩などをとって第2部に入ります。

その前にお願いがあります。お手元の袋にアンケートが入っています。アンケートに是非ですね、お答えいただきたいのと、もう一つのお知らせがあります。今日のシンポジウムをデイリー葛飾放送が、予定は5月13日の火曜日、初回は18:00から、それから再放送は4回ございます。14日、7:00、8:00、12:00とありますので、是非ごらんになってください。

休憩の時間にアンケートを書いていただければ非常にうれしいです。アンケートを書いていただく、鉛筆が、袋の中に入れてございますので、ご利用ください。それではお手洗い休憩として、14時30分から意見交換会討論会を始めます。それから後ろの方にNPOの方が用意してくれたパネルがございます。ご覧下さい。アンケートは受付にお渡し下さい。最後に面白いプレゼントがございますので、最後までお付き合いください。それでは、休憩に入ります。

<休憩>

## 6. 意見交換・討論会 (司会進行：土肥英生、パネリスト：中川、加藤、鈴木、石川、岩城、鴨川)

総合司会)

それでは、司会進行にバトンタッチして第2部に入りたいと思います。第2部の司会は土肥さんです。よろしくお願いいたします。

## 司会進行)

皆様、こんにちは。これから2時間弱にわたって、会場を交えて座談会のような形で和やかにやろうと思っておりますので、よろしく申し上げます。私は、NPO 法人日本都市計画家協会の事務局長をやっております土肥と申します。

まず、会場入口のパネルにも載っていましたが、ミャンマーにサイクロンが襲って10万人以上の方が亡くなるという状況であり、東京でも地震が何度かあり、災害が切迫したような状況にある。皆様は水害の経験というはお持ちでしょうか。今日は、壇上の方に、水害という事をどうゆう経験があったか、経験を踏まえてどういうふうに思っているか、というところを切り口としてお話してもらいたいと思います。一番左はじ、中川榮久さん。葛飾区新小岩北地区連合町会の会長をされております。続いて、岩城健二さん。葛飾区新小岩第3自治会会長です。鈴木和久さん、葛飾区西新小岩三丁目会長です。続いて石川金治さん。NPO 法人ア！安全・快適街づくりの理事長で。そして、加藤孝明さん、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教です。最後に、鴨川美紀さん。葛飾区区民で、こういった活動にずっと従事されている方です。では、中川さんの方からよろしく申し上げます。



## 中川)

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました。北地区連合町会の中川でございます。日ごろの町会活動では皆さんにお世話になっております。今日はまた、加藤先生をはじめ諸先生方からいろいろアドバイスを頂きながら、我々が一生懸命勉強してきた事をここで発表させていただいたり、経験談を話させていただいたりするわけですが、今日を境といたしまして皆さんに関心を持っていただいて、一人でも多くの方にお知らせしていただければありがたいなと思っております。



まず、水害の体験でございますけれども、水害が大好きなのです。皆さんは嫌いですか。私は大好きなのです。なぜ大好きかという、学校が休めたのです。子供の頃、地域性ですが金魚がとれたんです。新小岩北地区には大きな金魚屋さんが三軒ありまして、その金魚がみんな逃げるのです。それを追いかけて回るのが楽しみで、学校は休みになるし、もう毎日水害が来ないかなと思っていたのですけれども、実は、そう思っていた時に、昭和22年カスリーン台風という大変大きな台風を経験しまして、大変びっくりしました。ああゆう台風、大水はですね、来てもらいたくないと思いました。これを知らないでいたらもう少し楽しいのかなとこうゆう風に思っている次第でございます。まず、カスリーン台風でございますが、皆さんも経験された方は多いと思っておりますけれども、私の家は比較的土地が高い方なのですが、押入れの中段から約30cm下まで来てしまいました。あれは昭和22年9月18か19日だと思っておりますが、明け方に水がくるよと言われて、お昼ごろにはいっぱいになってしまったという事でございます。ただ、水がくるまでに時間がありましたので、皆さんは被害が少なかったのではないかと考えておりますが、先ほどお話があったとおり、もしも堤防が決壊した時であったらこうゆう風に間に合いません。大変な事態になってしまうのではなかろうかと。その中で、まず考えられるのは、困ったのは、飲み物です。水が無いのです。水があって、飲み物がない。これが困るのです。トイレはいいのです。全部が水洗ですから。窓から全部捨ててしまえば全部水洗ですからこれはいいのですけれども、水がないという



事が大変困りました。それで、これは区の方からも話があったかもしれませんが、井戸水というのが相当使えたものですから、井戸水をこれからもっと考えたらいいのではないかと思います。もう一つは表にいかれないから、階段が家の中ですから、泳いでいかないと表に出られません。ですから、水と梯子、梯子があれば窓から出られますので、それも用意したほうがいいのではないかなと、他にいろいろありますが、それにつきましてはこの後、皆さんと議論していきたいと思っています。今日はよろしくどうぞお願いいたします。

#### 司会進行)

それでは、区外からという事で加藤先生からお願いします。

#### 加藤)

加藤です。先ほどお話したとおり、僕はゼロメートル地帯育ちですので、水害に対する関心はきわめて高いだろうと皆さんお思いかもしれませんが、小学生の小さい頃にみた水位表示が上の方にあるという時に、一瞬おどろいただけで、その後は川の水面が、自分の住んでいるところよりも高い、それは当然だという雰囲気感覚に、いつの間になくなってしまいました。実は水害についての研究というのは隣の石川さんに誘われてやり始めたのもごく最近で、それまではずっと地震防災の分野を研究していました。地震防災と水害に関する防災は非常に近いはずなのですが、水害についてはなぜか関心が低くて、国土交通省の河川局に任せておけば大丈夫だろうと何の検証もなしにごく最近まで思っていたわけです。ところが、実際にふたを開けてみると、地震防災に比べると、いかに市街地側が備えていなかったのか、ということが非常に強い最初の印象でした。こういう点からみると、まだまだやるべきことがたくさんあるという気はしています。僕の水害の経験についてですが、今振り返ると、先ほど中川さんが言われていましたけれど、楽しかった記憶があります。子供の頃、水害があって確かに水につかりましたが、私の家は自然堤防の上でしたので、僕の家は浸りませんでした。で、周りは浸かっているんです。で、浸かっている所にわざわざ入りにいくんです。で、入ってきて一回りして「楽しかったあ」で帰ってきていた。つまりきちんと備えていれば、実は楽しいかもしれないと思います。僕のプロフィールの所に書いてありましたが、「大洪水を数百年に一度のお祭り」にしたいと。たぶん、お祭り感覚で迎えられることが一番いい状態かなという気がしています。

深刻な水害経験はほぼ無いに等しくて、これまでも関心がなかった。だけど一回関心を持つとやるべきことが沢山あって、だんだん楽しくなってきたというのが今の私の状況です。

#### 司会進行)

ありがとうございました。引き続き、鈴木さんの方からよろしくおねがいします。

#### 鈴木)

三丁目の鈴木です。前段の話は中川会長がいろいろさせていただいたので、即体験談に入らせていただきたいと思います。昭和 22 年の台風ということで、まだ私は 6 つぐらいでした。だから記憶はところどころになるんですが、私の住んでいる所、ならびに私の町会は、中川の土手を背にした土地ですので、マップから見るとやはり低い地ということで、どんづまり、水がくるのが一番遅かったんじゃないかと思うし、



また反面引けるのも一番遅かったんじゃないかと思います。自分たち、私生活からいきますと子供の頃の記憶ですが、農家だったもので鴨居のところに、田舟という船がありまして、大人が田舟に張り付いて中二階に入れるような水の量でした。自分の生活を見ますと、一部2階で6畳間が年寄りの住まいという事であったんですけども、地域に親戚があって、その当時地域には2階建ての家というのは大変少なくて、9月ですから、まだまだ上平井という土地は、22年ごろは蚊がいっぱいで、蚊帳をつつて6畳間に15人とか20人とか、そんな風な生活をした記憶があります。それと水が引けるのが遅かったもんで、屋根に梯子をかけてですね、そこから出入りした記憶があります。大きい水害というのはそのくらいですけども、子供ながらに上平井の土地は低いということで、ちょっと大雨が降ったり、あるいは台風が来たりすると、すぐ床下浸水ということがあり、大変子供ながらに、水というか楽しいか楽しくないか、今みたいに真剣に考えた事はありませんが、けれども、地域をみて、たとえばうちを新しく建て替えるという事になりますと、体外、50cmか1mと隣のうちから高くするというぐらい地域として水に対する関心があったんじゃないかな、と思います。そのような記憶がございます。またその当時2階の無い人は、今みたく、剃刀堤防というか、コンクリじゃなくて、土手の土の土手にして、あそこが荒川の河川敷でございませんですけど、テント村じゃないですけど、殆どが土手の上で生活していた。そのような記憶があります。ありがとうございます。

#### 司会進行)

では続いては石川さんお願いします。

#### 石川)

ええ、先ほどもご挨拶で申し上げましたけれども、台地で水害が起きたときは、一夜明けると水がなくなるんですね、ゼロメートル地帯というのはそうはいかないですね。で、被害が大きいのも台地よりもこうゆう河口付近というのが多いのです。世界の歴史を見てですね、一度の台風とかサイクロンで30万人以上亡くなった事例というのは、九つあるんです。そのうち6つはゼロメートル地帯で起きているんです。そうゆう事からみてもゼロメートル地帯というのは、災害を受けると被害が非常に大きいわけですね。そうゆう事を一つ認識していただきたいという事。もう一つは外国のゼロメートル地帯でも例えばニューオーリンズみたいにあそこも石油の汲み上げで、海面より低くなったところなんですね。そうゆうところでは、今、台風の話をしてはいますけれども、日常の満潮の水位でもって背が立たなくなるんですね。だから日常の満潮でも危ない地域だという事なんです。先ほど青木収入役からもお話がありましたように、河川管理者丈夫な堤防を作っているんです。だから普通の地震では壊れないように出来ているんです。ところが最近の現象みてわかりますように、柏崎の原子力発電所ね、対応の応力・外力の3倍とか5倍のものが働くケースもあるんです。それはどういう所か言うと、断層の上にある時なんです。原子力発電所は点ですから、断層を避けて作れば、逃れることが出来るんです、その研究を一生懸命やっているんですね。それが堤防だとか高速道路は線ですよ、どうしても断層と交わる場所が出てくる可能性が高いんです。高速道路を断層と平行して走らせればいいんですが、それでは目的地につかないですね、いつまでたっても。どこかで横断しなければいけない。堤防もやっぱりそうゆうことで、線につながっているわけですから、どこかで断層の上に堤防が来る所があるわけです。一方、何処が断層かというのはなかなか決められないの。だからそのような所



では切れるかも知れないということだけ頭の中に入れておいて、切れたらどう対応するかと、そういうソフトの事を考えている人と考えていない人とは、初期対応が全く違いますから、命が助かる人と助からない人の区別は日常のそういう努力をしたかしないかで決まります。是非そういう事を認識していただきたいと思っています。

#### 司会進行)

ありがとうございます。それではつづいて岩城さんお願いします。

#### 岩城)

こんにちは。新小岩南第3自治会の岩城と申します。よろしく申し上げます。今日は南地域から参加させていただいたのは、中川会長が北地区代表という事でいろいろな話が聞けるから、南の方でも是非話を聞いたらどうかということで、南の佐藤会長さんのほうに話がありまして、そうした関係で、佐藤会長から代わりに出るよということで、参加させていただきました。水害体験ということなんですが、例のカスリーン台風は、ご存知の方多いと思いますけれども、群馬県境に近い埼玉県の栗橋というところが切れたわけで新小岩まで水がくるのに、かなり日数がかかっているわけで、確か3日か4日かかっている記憶があるんですけども、うちの親父が建築の方を得意としていまして、3日4日の間に10センチ角ぐらいの10本ぐらい並べていかだを作ったんです。いかだをつくって浸水時にはそれで動き回ろうという事で、対応が良かったということで、私は平屋に住んでいたのですが、床から1mぐらいの所に畳をひきつめまして家財道具を置いたんです。子供の頃のことですから、皆さんそういう対応をしているのかなと思ったんですが、後で聞くと皆さんなかなかそういう対応をした方が少ないということで、ちょっと自慢話になってしまうんですが、そんな事で私はちょっと貸宅がありまして2階家が一つあったもんですから、2階で半月か一ヶ月いたんですかね、そんな事で、2階生活は家族共々、間借りさんの方々と一緒に1ヶ月か半月過ごさせていた経験があるんですけども。そんな悠長な水害はないんでしょうけど、たまたまそういう対応が出来たということです。結果として、そこそこに出たかなと思っていますところですよ。



#### 司会進行)

ありがとうございます。なかなか現場感覚がある、こういう事があったんだなというお話でした。それでは、第一ラウンド最後は若い人代表ということで葛飾区民でもあります鴨川さんよろしく願います。

#### 鴨川)

はじめまして、葛飾区民の鴨川と申します。今日ご紹介もありましたが私が壇上にあがらしていただいているのは、これまでのワークショップでお手伝いさせていただいた経緯もあるんですが、町会さんやNPOだけではなくて、地域に住む一人一人が重要な課題だと考えて一緒に取り組んでいく事は、大事なんじゃないかなという事で、この壇上に上がっているんじゃないかなと思っています。今日は若い世代という事で、50年後はまだぎりぎり生きているかなという年齢なんですが、一緒にお話ができたらいいなと思っています。よろしく申し上げます。私の水害の体験というのは全く無いに等しくて、私

の住んでいる家に水が入ってきという事は全くありませんでした。私が高校卒業まで住んでいた地元の那珂湊、今のひたちなか市という所に住んでいたところでは、那珂川という割りと大きな川があったので、たまに那珂川が氾濫して川の両側にある田園地帯があるんですが、そこが水浸しになったというのを見た程度で、加藤先生も楽しまれたとっていたんですが、昔の写真を見ていると水害をバックにとった写真が残っているという記憶があります。なので、自分の家まで水が入ってきしまうという経験がないので、全く実感がわからないというのが正直なところであります。



**司会進行)**

ありがとうございます。ちょっと鴨川さんにもう少しお聞きしたいのですが、こういった水害、昔の人たちが水害を経験していたという事に対して、どんな意識を持っているのかというのを聞きたい。

**鴨川)**

そうゆう話をしたことが無いので、友達がどう考えているかというのは正直わからないですが、地震の場合は、神戸の大きな地震があって、近くだったりして体験しているという方もいるので、怖いね、どうなっちゃうんだろうね、という話はたまにすることがあります。

**司会進行)**

家族ではした事がありますか

**鴨川)**

家族では、家が壊れてしまわないかなという話は地震があるたびにしています。

**司会進行)**

それでは、ご自宅の中で、家族と水害の話は結構されているんですか。

**中川)**

最近、家族に話をしているのですが、地震があると怖いですよ。怖いですけれども、逃げる道があるのですよね。歩けるのです。ただ、水害の場合は、逃げていく道がなくなるので、これは地震より水害の方がよっぽど気をつけていかなければいけないのではないかという話はさせてもらっています。

**司会進行)**

ありがとうございます。ちょっと衝撃的なんですけど、何処も全部まわりが水に浸ってしまうという、おっしゃるように、逃げる場所があるんだろうかということだと思んですが、そういった現状を把握するために、加藤先生と石川さん中心にワークショップをいろいろやりました。さっき紹介があったのですが、この会場の中には参加されている方が沢山いらっしゃいますので、実際に何処まで浸ってしまうのかという事を含めて、ワークショップをやってどのようにお考えになったかという事を話してみたいと思います。加藤先生、お願いいたします。

加藤)

二つだけお話してもよろしいでしょうか。そもそもワークショップをやろうと思ったときに、最低限これだけはちょっとやりたいなというのが、この二つなんです。

一つは、ワークショップを機会にして次の行動につなげたいというのがありました。地震災害と違って、水害はわりとメカニズムが簡単なんです。水は高いところから低いところに流れるだけですので、逆には行かない、複雑な動きもそれほどしないはずなんです。だから、低いところに住んでいる方は当然危ないということはわかっている。抽象的にわかっているだけだと、次の行動、対策にはなかなか結びつかない。抽象的な理解から、一步先に進めるためにはどうしたら良いのかということを考えていました。それはどういう事かということ、自分の問題として危険性を理解できるかどうかということと、自分の住んでいる町で災害が起きたときに、具体的にどういう状況になるのかということのを頭の中でイメージできるようになる。こうゆう状況になれば、何かしなければいけないという次の行動に結びつくのではないかと思います。これは、一つのワークショップの成果を評価するポイントになるのではないかと思います。

もう一つは、持続的に取り組んでいきたいということです。地震もそうですが、地震が起きるとぱつと気分が盛り上がり、非常用持ち出し袋を買うんですが、いつの間にか何処にあるかわからなくなったりします。気分は一瞬だけ上がるんだけど、それが長続きしないというのは、防災意識の常かなと思っていて、今回はそうならないように、それを続けていくためにどうしたらいいのかというのを最初に意識していました。他の災害と違って、この地域の特有さ、すごく難しいことがあると思います。広域ゼロメートル市街地、ではどういった対策を立てればいいのかと考えた時に、うまく答えられない。こういった問題にぶち当たった時の一番適切な対応というのは、そんなことを考えても怖いから考えないようにしようか、見なかったことにしようか、とすれば、日々幸せに暮らせるんですね。たぶん、人間の本质はそうだと思うんです。あまりにも厳しい状況につきつけられるとそこから逃げていっちゃう。というのが、普通の対応だと思っています。もしかしら適切な対応かもしれません。そうなりがちかと思うんです。「危ない、危ない、危ない」というともうあきらめるしかない、かもしれない。そうならず、前向きな姿勢で、前向きな発想で、少しでもいいから前に進んでいこう。そして、長期的には絶対安全な水害を楽しめるような町にするんだというような気持ちを持っていただくことがとても大切かなと思います。

この2点がワークショップを評価するポイントかなと考えています。是非、皆さんに感想を聞きたいなと思います。



司会進行)

ありがとうございます。是非、加藤さんの話を踏まえて、会場の方から、参加されたかたどなたかお話をいただけないでしょうか。

会場)

私も5回ワークショップに参加しまして、感じた事をお話します。私自身も4歳の時にカスリーン台風で、家の近くの郵便局に避難しました。その時に、近くの養豚場がありまして、上から子豚・大豚ちゃん泳いでいるのをよく見ましたけれども、それは、親が助けてくれたからこそ今がある事でござい

まして、結論を申しますと、5回ワークショップに参加させていただきまして、まず、自助努力といえますか、自分がそういう事にあつた時にどうしたらよいかという事、それから共助という事で、町会・地域の方とどういう風にスタートできるか。その後に公助ということで行政の方とどうゆう面で援助できるかという事をシミュレーションでいろいろと10年先はどういう風になるかと感じました。私の所の5丁目は今3600人人口がおりまして、避難収容が想定で行きますと1500人ぐらしか収容できません。約2000名の方が避難できないということです。そこで自治会長さんと、近くの高層マンションがあります。その管理組織の会長さんに、そういう時には3階を避難場所に是非お願いしたいという事を、協力していただきませんかという事をやっています。それから、スーパー堤防というのが、江戸川区の平井にはあります。今、川端のところに大きな堤防が作られつつあります。被害者意識というか公助を考えると、ある程度のこれを作るんだという目的意識があれば、おそらくスーパー堤防を作るのも不可能ではないと考えています。まず、自分自身が自助努力をどうしたらよいかという事をこの5回で感じました。その次に、家族とか近くの一人暮らしのお年寄りとか、そういう方の安全という共助の問題。それから、後に行政の方がどうゆう風にしていただけるかという事をシミュレーションですが自分の頭の中で感じている次第です。ありがとうございました。(西新小岩五丁目在住)



#### 司会進行)

ありがとうございました。

#### 会場)

私も水害に対する事は、関心は強い方かなと私なりに感じているのですが、ア！安全・快適街づくりのシンポジウムがあるということを知りましたので、皆さんにお世話になりながら、勉強させていただきました。そこで感じた事は、自分なりの努力をしなければならぬと感じた事をほんのちょっとだけお話させていただきます。私ども年寄りかもしれませんが、カタカナ文字が大分弱いです。勉強不足があるかも知れませんが、わかりやすく、注釈でもつけてもらえればありがたいと思っています。最近、ローマ字・カタカナ文字が氾濫するのは当たり前かもしれませんが、我々もこれから勉強していかなければいけないと考えます。地震に対することに関しては、どうしようか、ああしようかと頭の片隅にはありましたが、水害に関してはまるっきりありませんでした。私も住んで何十年になります、ゼロメートルという事は聞いておりました。果たしてどのくらいかなと。ゼロメートルという事は水より低いんだと。私のところは1mぐらい低いと。最近の話によりますと3mぐらい低いところもあるように聞いていますので、水が出たら、どうしようかな。とシンポジウムで初めて感じた事で、加藤先生はじめNPOの石川理事長のおかげだなと感じております。これからも、参加している人は、多少なりとも勉強していますけれども、どうゆう形にしても大勢の皆さんにご理解いただくということが一番の先決の問題かなと思います。それと自分の問題として取り上げてもらうと。いわゆる自助・共助云々とありますが、自分のところは自分で最初に守らなくてはならないと私自身は思っています。それから援助を受ける際には、それぞれ関係機関・行政等がございますから、命さえあれば、ある程度できると。自分のところの近場の人たちには、どんな災害があってもあわてるな、お互い身の安全を確保しろと、それと隣近所年寄りとか子供がいれば、自分が逃げる前に必ず声をかけようと、そう



いったお互いに助け合う事が一番のポイントかなとそういう心構えでいますので、シンポジウムも後何回でも結構です。私ども勉強したいと思いますので、今後ともよろしくご指導いただきたいと思います。  
(西新小岩四丁目在住)

#### 司会進行)

ありがとうございました。自分でやっていこうという強い気持ちが伝わってくるお話でした。それから、どなたかいらっしゃいますか。

#### 会場)

ワークショップには3回ほど参加いたしまして、その中で特に感じた事は、大成化工さんの会社の入口の所に水位表示のポールがございます。あれに興味を持ちまして、まず私ども上小松町会は新小岩の北で蔵前通りに面しているところですが、自分たちの所がゼロメートルというのは、いったい具体的にどのぐらいの所にあるんだろうかという事で、役所の方にもお願いしまして、ゼロメートルというのはこの辺ですという表示を、上小松町会の町会会館の所に表示いたしました。アルミの五センチ角ぐらいのポールに、東京湾の平均水位が私の腰ぐらいの高さがゼロという表示、と同時に荒川の水位 A.P が腰に。過去の最高の水位の表示が、ポールが短いので会館の2階の建物のところに矢印で表示してあります。まず、地域がどういう所にあるのかという所を認識し、危機感を感じてくれるし、それからの対策という事で具体的には何をやっていませんが、情報伝達、これが一番大事な事かなと感じています。ついこないだも、地震がございましたが、大きかったらどうしようかと一瞬頭をよぎったんですが、そういった危機感を感じ、ご指導を頂きながら対策を考えていきたいと思います。以上です。よろしくお願ひします。(上小松町在住)



#### 司会進行)

ありがとうございました。具体的に、町内会館にしるしをつける、そういう取り組みというのが、とても皆さんの意識を啓発させる意味でも、とても意味のあることだと思います。加藤先生どうですか。

#### 加藤)

やった甲斐があったかなという感じです。目標は達成されたかなという自分自身の気分もあるんですが、今のお話ですと、ワークショップに参加された方の中でも町会長さんですから、ものすごく前向きにやられている感じだと思うのです。もしかしたら、お付き合いできた方もいると思うので、もう少し率直な意見・感想を言っていただくと尚、次回以降につながるかなと思います。

#### 会場)



先ほどから中川会長が仰っていましたが、水害があった場合、飲料水はどういう風に考えているのでしょうか。地震の場合、葛飾区長が、この前市議会を傍聴にいきましたら、新小岩公園に水道水の貯水タンクがあるから大丈夫だというけれども、水害になったら、いくら新小岩公園といっても水没してしまうんじゃないかと思うんです。その点、葛飾区の方はどのような考えでいるのでしょうか。それから、先ほどの鈴木

さんが仰いましたけれども、私は鈴木さんの近くに住んでおまして、水害があった時に、中川の水を小さな濾過機で濾して飲料水として使ったんです。けど時々、二上小学校の防災訓練があるのですが、飲料水として濾すんだとって、水道水をバケツに入れてきて、また濾過機に入れて濾すんだということをやっていた。そんなことをやっていたってダメだとこの間いったんですが、綺麗な水を濾しても綺麗なんです。汚い水を濾して飲料水なんです。昔、水害があった時は、中川の水を、今みたいに汚くはなかったけれど、それでも濾してみんなで飲んでいた。だから水害に対して、葛飾区の考え方は、どうなのかなという事をお聞きしたいと思います。(東新小岩八丁目在住)

加藤)

今日は、葛飾区の方もいらっしゃっていますが、発言する予定じゃなかったのが、代わりに僕が話したいと思います。今言われた二つの話というのは、本質を突いていると思います。ワークショップの中でも、町会の皆さんに防災資源を探してこようという、探してきたわけです。そこで地震用の防災備蓄倉庫も、実は町の中に沢山あるんです。ところが、水害の浸水の深さと重ね合わせてみると、7~8割方、水に浸かっているという状態でした。綺麗な水に浸かっていたら、アルファ米もおいしく食べられるかと思いますが、汚い水ですから食べられなくなってしまいます。だから、水害の事を、市街地側があんまり考えてなかった。これは町会の取り組みもそうだし、行政の取り組みもそうだと思うんです。そういう意味で、これから、今日をきっかけにしてもよいですが、水害にも地震にも耐えられる、がんばれる地域を作っていくというのが非常に大きな課題だと思います。皆さんもそういう意識をもってられると思うので、区にしろ、東京都、国にしろ、今後、そうやっていくと思います。

二つ目、これは非常に面白いですね。水道水を濾して飲む。さぞ美味しいと思うんですけども、先ほど来、カスリーン台風の経験談も出ていますけれども、当時と比べると人間が非常に弱くなっていると思うんです。先ほどお父さんが柱を組んでいかだを組んだというお話をしていましたけれども、今そう結う事が起こると僕がそのお父さん役にならなきゃいけないんですけども、僕が作りたいかだに子供を乗せられるかという心配で乗せられないです。そうゆう技術もなくなっているし、そもそもいかだを作るような材料が町の中から消えちゃっているんです。ワークショップの中でもいろんな水害経験のノウハウというのが皆さんから聞いて面白いなと思ったんですが、雨戸をいかだ代わりにする。1枚だと沈むけれども2枚だと沈まないという。今、雨戸は全く無いですね。アルミサッシですから、ぜんぜん話にならない。そういう意味で、昔の状況と、今の状況は町も違うし、町の中にあるものも違うし、もっと違うのは人間が違うと思います。僕も、5年ぐらい前は大学のどんな汚いところでも夜徹夜しても寝られましたけれども、最近は寝られなくなりました。そういうところをどう変えていくか、人間をどう強くしていくか、個人のサバイバルの能力、生き残っていくための能力を高めていくかという事は、地域だとか、学校の教育だとかかなり長い時間をかけて、取り組んでいかないといけないのかなと思います。そういう意味では、いい課題を指摘くださったなと思います。

司会進行)

ありがとうございます。どなたかいらっしゃいますか。

会場)

私も経験があるんですけども、区役所の方にもいい濾過機を持っていると思います。葛飾区の総合



防災でも使っています。私も経験がありますが、泥水でした。その泥水を濾過して飲みました。味はすごくいいです。これでも大丈夫かね。と聞くと、大丈夫だよという事です。それから、新小岩公園に水道水があるという事ですが、確かに水没の可能性があると思います。話によると3万トンか、3万人分の水道水があると聞いていますけれども、ですからア！安全快適街づくりで、新小岩公園のかさ上げを要請しているという話も、そのへんから出ているのかなと私なりに感じております。それから、先ほど言い忘れましたけれども、公園等については、水位表示を作っていたので、この辺まで水がくるのかなということを実感としてわかっていただくと、いいことだなと感じています。中に、ぜんぜん関心の無い人はこのポールはなんのためなの。と聞いていますけれど、この線はゼロメートルなんだからと、この上に水がきたときを考えなさいと、自分なりの経験で、説明はします。ありがとうございました。

#### 司会進行)

ありがとうございました。加藤さんどうぞ。

#### 加藤)

一言だけ。今、皆さんのお話を一通り聞いて、一応効果があったと解釈をさせていただきたいと思います。ただし、少し気がかりなのはここに今日いらっしゃっている方は、これまでの経験を通じて意識が高まって、これから地域でがんばっていかうという方が集まっているんですね。そうゆう方々にどうでしたかと聞くと、すばらしいと。それはそうですね、今いらっしゃっているわけですから。むしろ、問題なのはここにいらっしゃっていない方々に対して、今後どうしていくかということが、一つ大きな宿題かなと感じました。

#### 中川)

先生が仰るとおり、どうやってみんなにこうゆう事を知ってもらおうかな、という事は、これからの町会の課題であると思っています。それから先ほどのお水の問題なのですが地域性であったと思いますが、我が町内には昔、ふ海苔ってご存知ですか。ふ海苔屋さんがあったのです。そこには大変すばらしいお水を出す井戸があるんです。100mか150mぐらい掘ってあるんでしょうけど、そこから出る水は、何もしなくても飲める、大変すばらしい水があるんです。



それが、当七丁目町会に松山さんというお宅があるんですが、そこにまだイキてる、というんですよ。だからそういうものを開発していただいて、ただ汲み上げるのがポンプなので、モーターが必要になってきますので、モーターはディーゼルかでもって、汲み上げてもらえれば助かるのではないかなと思います。決して、おなかを壊すような水ではない綺麗な水です。そして井戸水は10m~15mしか掘っていないんですが、あれはパイプでやっているの、水がきても、下から汲み上げる水は汚くはないはず。手押しポンプは知っていますか。あれは、高いところにあるので、昭和22年のときにはそれで、水を汲んで、こし水という、かめの中に入れて、下に穴が開いていまして、そこに砂とか砂利だとか、シロの葉っぱ、木の周りに巻いてある、網状のやつをひいて、あと炭をのせて、汚い水をかける

と、下から綺麗な水がでてくるんです。それをこし水というんですが、それがあれば、水を汲み上げて使えるんじゃないかなと思います。昔みたいに、丸い釣瓶で汲み上げるものも、あれも1mぐらい高かったから水が入らなかったの、それも使えました。低いところもあるので、それは使えなかったのもありました。もし、井戸水が生きていれば、探したら、何軒かあるんじゃないかなと思いました。

#### 司会進行)

ありがとうございました。本当に昔の工夫というのはすごいですね。学ぶ事が沢山あると感じます。今のお話、ワークショップをやって実際に町内会としてもやっていこうではないか、あるいは広めていこうではないかという話があったと思うのですが、では、具体的にこれから、この水害に、なかなか問題解決案は無いと加藤さん仰っていましたが、無い中でも、どんな事が出来るんだろうかとそれぞれお考えの事があると思います。ここで、まず最初に壇上から、お考えをお話していただいた上で、また会場のほうからどんなアイデアがあるかどうかを聞いていきたいと思います。まず、鈴木さんの方からおねがいします。

#### 鈴木)

私は、三丁目という事で、大成化工さんと同じ町会ということで、前社長の徳倉さんの呼びかけでNPOが立ち上がる前から、そうゆうお話を聞いておりました。それと、スーパー堤防ということで、はじめ聞いた時には、はっきり言ってスーパー堤防を理解できておりませんでした。いろいろ見学させていただいたりなんかして、土手が50m~100mという事は、土手が一般の平地だということで、これならば多少大きな地震がきて地割れしても、堤防が決壊する事はないんじゃないかなということで、感動したんですけれども、大変大きな話で、一町会、一住民で活動するなり、例えば、我々から行政を通して、大きな問題という事で、NPOが立ち上がりまして、いろんな情報や話が聞けたという事でした。それから水位計の話も石川理事長から、三丁目を中心にしてNPOの方に8本やらせていただいたんですけれども、もしこれをやったら地元の不動産企業が反対するんじゃないかなという様な、相談を受けまして、当然不動産の方は、荒川が決壊したら、建売にしてもなんでも、引越したくなるんじゃないかなと思いました。ただ、一番大事なことは、私自身も子供の頃から自分の住んでいる土地が、地盤が低いという認識がありましたけれども、水位計ができて初めて、大潮の満潮の時は2階でも住めないというあらためて自分たちが住んでいるところがいかに低いかという事が大変認識できた次第でございます。会員なんです、1回~5回のワークショップに参加していただいた方は、重複しております。町会といたしましても、会員にこうゆう事を啓蒙しなければいけないけれども、昭和22年からもう60年以上ですから、経験している方が大分高齢になってしまい、今の町会、ならびにそれぞれの



家庭を形成している家長は40代~50代ということで、非常に平和で過ごしてきて、やはり実感としてわいていないということじゃないかと。そこは町会として苦勞するところかと思いますが、やはり何かの機会でも町会としてお知らせし、後は各個人がどれだけ、認識を持つかが、これからの町会としての課題じゃないかなと。けて町会としてあきらめているわけじゃなくて、総会や人の集まる場所でお話をしていきたいと思っています。よろしくどうぞ。

司会進行)

ありがとうございます。つづきまして、岩城さんどうぞ。

岩城)

水位表示板は非常に大事なものだと思います。区役所の方に、水位表示板を何箇所かに設置してほしくないかという事で、3年前ぐらいにお話しましたが、やっぱり安価なものではなく、当時20万ぐらいして方々に設置するわけにはいかないんだと言うお話をきかされたんですが、今は簡単に200箇所急に増えたということで、聞いてみると電信柱に赤いマークをする事で水位表示板は高価なものを使わないで出来るということなので、是非水位がどのぐらい来るのかということ、住民の皆さん一人一人に認識してもらう事は、防災の第一歩を進める上で大きな要点じゃないかなと強く思いました。



司会進行)

ありがとうございました。本当に具体的にやろうとしている、例えば大きな目標としてのスーパー堤防のお話とか、水位表示板とか見えているなという感じをうけました。続いては鴨川さん、全く違う立場ですが水害についてどう考えて対策していったらいいか。

鴨川)

今、お話の中でもいくつかでたのと、私がワークショップやボート体験で一緒させていただきながら考えてきた事で、まずハザードマップというがあったのですが、このハザードマップは私の家にも入っていて、その時は手元に確認できなくて、後からもらったんですが、私の所はブルーだったんですね。なので、安全なんだと思ってしまったというのが一つで、その後はそのまましまっておいたのですが、この壇上に立つという事で、もう一度見直してみるとブルーでも腰ぐらいまで水が来ってしまうという事をはっと気がついたというのがあるので、周知をすとかPRというのはハザードマップを作って配布したというだけでは、なかなか解決したというかクリアしているというのは、私個人としてはまだ難しいんじゃないかな、これからやるべきことはあるんじゃないかと思っています。

もちろん、水位表示板も含めて。その他にもNPOさんがやってきたボート体験も、もっといろんな所でやってみたりとか、大成化工さんが避難用のボートを各町会さんに贈与されたという事で、それを活用していくなかで、町会の方が中心となって行く中でその輪が、徐々に広まっていく、それで何をしているんだろうと興味をもった人がどんどん参加して、最終的には町中の人が一回は乗った事があるよ、この地域はボートが使えるんだという事になれば、短期的なソフト対策としてはやってもいいんじゃないかなと思います。



司会進行)

ありがとうございました。実際に体験的なところからやってみてはどうかということでしたが、ここで会場のほうにふって見て、こんな対策、あるいはこんな事を考えられたということで、是非ご意見を

伺いたいと思います。それでは、市古さんよろしいでしょうか。

## 市古)

こんにちは、首都大学の市古と申します。わたくしもいろんな地域で訓練や調査を体験していますがここまでやれる、それも地域と NPO、行政、専門家で力を発揮してやれた地区はないんじゃないかな、というのが僕の率直な感想です。その理由を僕なりに分析すると 3 点ぐらい、今回のプロジェクトで特徴的な、良かった点があったのかなと思います。一つは、とにかく楽しく出来たというのがあります。毎回 WS 当日を迎えて、楽しい雰囲気になりました。実は事務局は準備不足で大変な事がいろいろありました。当日迎えてみると、気が重いなという会もあったんですけども、会場に来てみて皆さんの顔を見て話を始めると、手ごたえを感じる事ができました。とにかく楽しく出来た、これは地域の力の一つだと思います。もう一つは、自画自賛かもしれませんが、WS で用いた手法にメリハリがあったんじゃないかと思います。街歩きからはじまって、ボート体験を入れたり、荒川を水上から見たり、現場体験も含めて様々な内容になりました。僕も、加藤先生、土肥さん、中村先生、菅田さんといった大学スタッフは、かなり力を出し切った面があります。持てる力をいろいろ発揮しました。例えばですね、北新小岩地区で 1.6 万人ぐらいの住民がいて、その中の限られた人数でワークショップをやったわけですけども、参加できていない方をどうフォローするかという点で、プログラム上は第 4 回目に、YES,NO ゲームというのをやりました。その中でこんな問題をやりました。「あなたは、寝たきりで介護が必要な 80 歳の旦那をかかえた 78 歳の奥さんです。町会から災害時要援護者に登録しますかという用紙が回ってきました。あなたは登録しますか、しませんか」という問いに YES,NO で答えるというゲームをやりました。これは結構意見が割れました。登録するという意見もあったし、ここまで来て、人様の手を煩わすのは忍びないというように想像していただいた方もいました。その他にも、子育て中の役とか八百屋の主人の役とかやりましたが、こういった事を通じて、地域にいろんな人がいて、災害時にいろんな活動がでそうだ、もしかしたらへんな事を言い出す人もいるかもしれませんが、災害時にこんな人がいそうだ、こんな人に力を借りればいい、といった話にならないかな、話になるきっかけが出来るんじゃないかと思います。つまり関連して 3 点目の点なのですが、あくまでも訓練としてやったんですが、訓練としてやったプログラムを、その場だけの話で終わるのではなく、日常的にやってみるといろいろつながってくる視点を持つことができたんじゃないかと思うんです。

今後の話で申し上げたいんですが、先ほど共助という話がありました。その会話でいうと、昨日今日の新聞をにぎわせている、似たような言葉に、中国の主席がこられて、福田首相と会話されて、戦略的互惠関係という言い方をされました。戦略的にというのが重要なのかなと思うんです。「戦略的に」を僕なりに解釈すると、災害時に、災害前にやっていないことは出来ないんです。災害前にやっていないことは、災害時にできるはずがない。例えば、地域の人に声をかけあって避難しよう。おじいちゃんおばあちゃん、体の不自由な高齢者に声をかけあって避難しようというのも、普段挨拶する関係や声をかけあう関係なくして、できるのでしょうか。そうゆう事なんです。互惠関係というのは、難しく考えるのではなくて、日常的に出来る事がいっぱいあって、その一つが挨拶をするとか、声をかけあう、そういったところから繋がっていく話がいっぱいあるんじゃないかなと思います。そういう点で、まだちょっと時間があるので、パネラーの方にお聞きしたいのは、戦略的に地域で取り組むには、何をやった



らいいのか。何かいいアイデアがもちよって、お話いただければと感じました。

**司会進行)**

ありがとうございます。それでは、中川さんお願いします。

**中川)**

先ほどからですね、どのようにしてみんなにこれを知らせたらいいか、知ってもらったらいいかということですが、水位標示板ですが、当町会でも作られました。これを写真に写して回覧板として全世帯に回しました。(写真は、)平和橋通りに立っている水位標示板に、当町会の 180cm ぐらいある防災部長が手を伸ばして届かないところに水が来ているよという事を、回覧としてまわしました。その前は、ボートの組み立てているところを写真にして、回覧板につけて全世帯に見てもらいました。地震の場合は歩いても逃げられますが、水が来たら歩いては逃げられません。しかしあのボートで何人が運べるでしょうか。だから一番肝心なのは、区の方から第一次避難勧告でもあった場合は、とにかく逃げるとい事が先決ではないかと考えております。そこで、町会で作ってあるのですが名前を書いていただいて、後ろがチェックシートになっていまして、老人であるよとか介護必要であるよ、乳児であるよとかいうチェックシートなのですが、これを、町会費を頂く時に、皆さんに配って、いやな人はいいいんです。私は一人で逃げられる人はいいいです。住所も電話番号も書いていただかなくて結構です。という事でこれを役員がもっているという事で、第一次避難勧告が来た場合は老人とか介護が必要な人に声をかけて、まずは逃がしたほうが良い、じゃないとどうにもならないんじゃないかと考えていまして、逐一こうゆう事をやっていきたいなと考えているところです。町会としてみんなで力をあわせて、役員力を合わせて、みんなで協働しながら、力を借りたいなと考えております。

**司会進行)**

ありがとうございます。それでは石川さん。

**石川)**

体験から学ぶという言葉がありますが、鈴木さんが言われたようにカスリーン台風からもう 60 年たっているから同じ水害を体験するのは難しい。それを補うのはこのワークショップみたいなものです。要するにイメージトレーニングという、想像していろんなことを考えるという事で、疑似体験をしていくのです。そのためにワークショップがあるのですが、これは若い人の方が、想像力が強いのです。野球で言えば、イチローとか。常にどういうフォームでどういう球を打つかを研究するのです。それからボクシングの選手は、相手が決まったら、あれはどういう風にくるから、どう対応しようかという事を想像しながらやっていく。そういう事得意なのは子供さんじゃないかと思えます。是非、子供さんのお話を聞けるような機会をお持ちの方が、会場の中にいらしたら聞いてみたいなと思えます。

**司会進行)**

はい、石川さんから子供の話の聞けるようにというお話でしたが、いかがでしょうか。内田さんよろしいでしょうか。今、子供の参加できるそういう水害対策について是非お話を聞きたいと思えますが。

**内田様)**

こんにちは、はじめまして内田と申します。私は、たまたま子供が参加できるような取り組みという事ですが、私が思うのは、水害にしても地震にしても、最近の子供さんのご父兄の方も薄いところがあるので、いつも近くに無いものとなるとうとう、考えが薄くなってしまっていて、防犯とかの勉強会をやる時には、親がまず出席して下さったりするんですけども、めったにない、直接自分たちにかかわりのないことに関しては、なかなかこういった事に参加して下さらないのが現状で、私もPTA活動に多少携わっております、そういう事をやっている上で、一番悩ましい所です。最近、いろいろやっている上で思ったのが、子供たちに例えば、昔はここまで水が来たのだという事を学校の道徳の時間で、子供たちに地域を回らせて、こうゆうのがあるのだよ、昔はここまで来たんだよ、そういう勉強をする事によって、子供が今度は家に帰って、お父さん・お母さんに、「今日こんな見てきた、お父さんの背よりも大きいところまで来ていたのだよ」、という親は少しずつ関心を持ち始めて、今度歩いている時にみてみようかという、子供は得意になって、「ここにこの線があるでしょ？昔は、この線まで水がきたんだよ」と親は本当にといてそれを人に言って、少しずつ広がると思うので、やはりこれからは水害にしても、地震災害にしても、いつも子供たちや中学生に言うのは、この地域を守るのは、いつもこの地域にいる中学生、小学生の高学年、そしてPTAのお母さん方、必ずといって良いほど、昼間でも夜もこの地域にいる人たちなので、この人たちの力を借りない手は無いと思うので、それも含めて、中学生や小学生にこういった教育をしていってもらって、まずは遊び半分で、探検ごっこをしながら、こういった事をわかってもらいながら、だんだん子供たちから広まって、そして、親に広がって、中学生や若い人たちに広まっていくと思うので、そういった感じでやっていった方が良いと思いました。

**司会進行)**

ありがとうございます。非常にいいお話だったと思います。ここにきている方々の年齢層は、低いとは言いがたいですが、参加者の年齢の幅が広がっていく事で、水害・防災という活動は継続していけるし、広がっていくのだと思います。

**加藤)**

今回のワークショップでも、水害のシミュレーションを行って、自分の家の1階がだめになって、2階がだめになるという事がわかるような技術を使っています。このシステムの開発の前に、地震火災でここから出火するとこういう風に燃え広がってしまうというのを、いろんな区の方や職種の方にみてもらうということ、かれこれ7・8年ぐらいやっています。今でもやっています。この中で見ていて、一番食いつきがいいのが、子供です。子供だと面白がって、次はそこから、こういう条件設定してとか、僕の家から燃やしてくださいと言って、いろんな事をやってどんどん盛り上がっていくのです。子供は遊びながら、ある種ゲーム感覚なのかもしれませんが、ゲーム感覚を加えた上で、どんどんどんどん前に進んでいける、自然に前に進んでいく力を持っているということで、そういう意味で、子供さんの地域における力というのは、実はものすごく強いのだなと感じています。ちなみに、一番反応が悪かったのは、自治体の方ですね。いろいろ考えなければいけないので大変だなと思いつつ、一番反応がなかった。

司会進行)

ありがとうございます。それ以外に会場からお話ありますでしょうか。徳倉さんお願いします。

徳倉)

NPOの副理事長をしております、大成化工の徳倉です。今日ここに私がいますのも、石川理事長がいますのも、子供の時の原体験から来ている事をご理解いただけたらと思います。私達は一緒に町に、三河湾の内海の海の近くに育ちました。そして8歳の時に大地震2回。それも校庭の地割れがして、家が倒れて死ぬ、火事はでるといような体験をしました。そして、高校2年の時に、これはまさにここと同じ状態のところ、堤防が切れまして、水害になったのです。その時の怖さ。水がぶあぁ～と押し寄せてくる。ひたひたと押し寄せてくるものではありません。プールの壁を切ったら水が上からかぶさってくるようなものです。そういう体験がありまして、二人とも東京に住んでおりまして、たまたまここに縁がありましたものですから、この所については、何とかしなくちゃ危ないと、そして中川と新中川の間で42万人の人が住んでいるのです。そしてこの42万人の人は中川が切れたらどんな状態になるのだろうか。間違いなく、私が勝手に推測するんですけど、数万人の人が命を失う。これは私がNPO



をやっといこうと思った原点でございます。石川理事長も都の技官として、それから隅田川のスーパー堤防の生みの親としてやってきた事から、この所は何とかなければいけないけれど手が出せなかった。だからこれからの余生はここに つぎ込もうと、その二人の重いが合致してNPOを立ち上げた。これが原点でございます。ということで、やはり子供の自分の思いというのは大変な事ですから、子供たちからの教育をしていく事は重要と思います。もう一つは、ひたひたと押し寄せてくる水害ではなく、どばっと、くるという実体験を画面でも、何でもいいから知っていただいて、それに対してどう対処していくかを検討してく事も加えていただければと思っています。

司会進行)

どうもありがとうございました。本当に伝わるお話だったと思います。実際に経験した事から考えていこうというのは、真実の事だとして伝わってきたと思いますが、シミュレーションというか、新しい体験をするやり方は、可能なのでしょうか。

加藤)

今の技術である程度可能です。

司会進行)

という事で、ワークショップも新しいシミュレーションの技術、いくつか入っていますし、これから新しい形で皆さんに知ってもらうという方法も出来てくるのかなと思います。だいたいお話もでてきて今後、水害の問題、実際の経験からどう対策を考えていこうかという時には、皆さんの力を寄せ



合って進めていくという事が、重要だと、皆さんのお話から伺えたと思います。最後の段階で、皆さんそれぞれに、今後、水害対策を進めていく時にどう考えていけばよいかご意見を伺っていきたいと思います。それでは、最初に鈴木さんの方からよろしいでしょうか。

**鈴木)**

いままで、町会の会員という事を、町会で進める事でしたけれども、いろいろお話をして、子供の方が、食いつきがいいということで、町会としても、いままで子供会ということで、ただ子供だと思って、馬鹿にしていたのですが、そちらに対しても水害にたいしての啓蒙活動を広めていきたいと思います。ありがとうございました。

**岩城)**

南の方も、北に続いて、これまでの経験を踏まえた発案がいろいろとありますので、そういった流れにそって、またPTAとより固まって子供の頃から意識付けをもってもらおうという方向も考えてみたいと思います。

**鴨川)**

まずは、自分で出来る事として、私の家には備蓄用の水が無いので、蓄えないといけないという事で、やっていきたいと思う事と、地域の中で出来る事、まずは自分の住んでいる地域の方々と殆ど面識がなくて、逆に新小岩の地区の方の方が知っているというぐらいなんです、地域の方々とどうやってコミュニケーションをとっていけるかという事も含めて、自分が出来ることを考えるという事をやっていければと思います。

**石川)**

加藤先生の最初の説明の中にありましたが、ゼロメートル地域というのは運命共同体です。だから、ここに集まってらっしゃる方は葛飾区の新小岩地域の方が大勢いらっしゃるのですが、この辺の堤防が切れたら江戸川も同じ状況になるんです。葛飾だけで終わるものじゃないのです。そういう意味で、もう少し連携を、行政域を超えてやっていくという方法を、これから編み出していく方法もあるのかなと思っています。

**加藤)**

合計4つお話したいと思います。

一つは、子供という話が出てきていると思うのですが、この地域の場合は60数年前に大きな水害があって、しかもその経験者がいるわけです。その経験を食いつきのいい子供にきちんと伝えていくという地域の仕組みが必要だと思います。子供の教育だけでもそれなりにいけるのだけれども、さらにお年寄りの体験をきちんと伝えていく仕組みが重要なのかなと思います。ただその時に、注意しなければいけないのは、先ほど綺麗な水を濾して飲んでいるという指摘がありましたけれども、当時の状況と今の状況の違いを踏まえて、きちんと翻訳しないといけない。今の大工仕事をあまりしたことがないお父さんにいかだを作れといっても、つくれないという話になってしまうので、経験を翻訳して、それを子供



に伝えるという事をやっていくといいのではないかと思います。それが、一つ目です。

二つ目は、先ほど、市古先生が戦略的にどう考えていくかが必要じゃないかというお話がありました。今回のワークショップの皆さんの議論の中で、明日来るかもしれない水害に備える、非常に短期的にするものから、学生さんの100年後の市街地像を構想するという非常に長期的なものがありました。これのバランスというのが難しい、けれどもきちんとしてをとりえていかないといけないかなと思います。短期的なことはすぐ出来るかもしれないけれど、限界がある。長期的なものはすぐできないかもしれないけれど、もしかしたらきちんとした安全性が確保できるかもしれない。これはどちらかだけだと片手落ちだと思います。この二つを上手に組み合わせながら、一步一步前に進んでいく、そのためにどうすれば良いかという、これを皆さん、僕が答えると思っているかもしれませんが、それをこれから皆さんと一緒に考えていかなければいけないと思っています。

三つ目が、仮に長期的にこういう市街地が良いだろうと考えていこうとした時に、いま水害をテーマにしているので、水害に対して安全な町ができればいい。それはそうですけれども、それだとつまらない町になってしまうかもしれない。それだと、苦勞する甲斐もないし、お金をつぎ込む甲斐もないような気がする。むしろ、危なくても楽しい町のほうがいいよ、と僕なんかは思うのですが、そういう意味で、単に安全になればいいということではなくて、安全になって、同時に楽しい、すばらしい、魅力的な町をどう考えていくのかという事を地域で考えていただきたいと思います。最後のイベントの時に、川から町を眺めた時に改めて思いました。日本の国は川や海に囲まれているんです。僕のいる研究室には、シルクロードにある中国新疆ウイグル自治区の学生がいます。彼らと一度隅田川の川くだりをしたことがあります。その時に、彼らはえらく感動していた。なんで感動しているのかという、彼らの育った町は、世界の中で一番海から遠い町なんです。だからあんな大量の水をみて感動していたんです。翻って我々は、身近に水があって、感動を与えるぐらいの水があるにもかかわらず、それをあまり使っていないと思うんですね。僕も子供の頃川に行くと危ないといわれてあまりいかなかったんです。川に近づいて溺れて死んだ友達もいますので、川は危ないものとして自分の遊ぶ空間としては避けざるをえない状況だったのですが、本来はもっと川と遊んで、川を、生活を豊かにするために使うという事が必要だと思います。そうするともっともって生活も豊かになる、しかも安全であればなお楽しいと思うんです。この方向の発想で考えていければいいかなと思っています。それが三点目です。

四点目は、先ほど石川さんが言われた事とも重なりませんが、運命共同体、江戸川・葛飾・足立、こういった地域で問題意識を共有する。共有した上で、みんな一緒に考えるという場作りをしなければいけないかなと思います。今日はその第一歩であり、新小岩北地区からはじまって、どんどん横に広がっていく、そういうことで、これまで焦点があたっていなかった広域ゼロメートル市街地の問題を社会的に、みんな考えていこうという動きにつながれるのではないかと思います。それが今、一番必要な事だと思っています。

#### 司会進行)

ありがとうございました。非常にわかりやすい四点のお話。一つは、子供への教育。二つ目は、短期・長期両方を戦略的に考えていこう。三つ目は、水ということを中心に危険とだけ捕らえるのではないという視点が重要だというお話、四点目は広げていくと、ここから広げていく事をやっていくべきというお話でした。それでは、中川さんよろしいでしょうか。

中川)

やはり、皆さんでこの問題をじっくり考えていき、一人でも多くの方に知っていただく事に結論されるのではないかと考えています。スーパー堤防とか、公園のかさ上げこれは、出来れば一番いいわけですが、これができれば皆さんが安心していられますが、これまで、どうしたら良いかということだろうと考えています。ですから、皆さんと力を合わせながら、逃げられないならば、来る前に逃げちゃおうということで、私どもの町会のこと、大変恐縮ですが、この秋には市川方面に車で逃がすというような練習、訓練をやりたいなと考えているわけです。皆さんにお話をして、その時には区の方にもお願いして、受け入れ態勢の方を一つ、市川にまでいったら雨が降って、雨風のなか道路に立ってないといけないという事の無いようにしていただければありがたいな、という事で、受け入れ態勢をばっちりしてもらって、それがあれば、安心していただけるんじゃないかと考えております。これから先も皆さんで力をあわせて一人でも多くの人に、危険であるという所にいるんだということを理解してもらって、どうするかということ、加藤先生のお話ではございませんが、みんなで検討していきたいと考えております。

## 7. まとめ（新小岩宣言）

司会進行)

どうもありがとうございました。すばらしいお話がありました。そこで、皆さんそろってお話ができたのは、皆さんの方向性を共有して、これから共に水害対策に対して取り組んでいこうではないかという事でしたので、ここでご提案ですが、宣言という形でこれから皆さんで共有したいと思いますが、よろしいでしょうか。（拍手）はい。それでは、今日は宣言をして最後に締めくくる形をとりたいと思います。やり方としては、壇上で宣言を話します。その後皆さんに宣言を話していただくという形で、ここの画面に映りますのでそれを読んでもらいます。それでは、「大規模水害への備えを通じた街づくりアクション 新小岩宣言」という事で、ここから日本全体にこの水害の街づくりを進めていこうという事でいきたいと思えます。最初に、冒頭の文章だけ総合司会の渡邊喜代美さんに読んでいただきたいと思えます。



総合司会)

では読みます。とても段取りが良いように思うかもしれませんが、結構みんなで考えていたわけです。今日のシンポジウムはまさにここにたどり着くために行われたようなすばらしいシンポジウムだったと思えます。

読みます。「新小岩宣言 わたしたちは、大規模への地域の備えを行うことによって、ゼロメートル市街地において、安心して生活できる環境を実現するとともに、地域のコミュニティが元気づけられる事を願い、ここに、次のような宣言を行います。」以下、中川さんからよろしく願います。

中川)

一、ゼロメートル市街地における大規模水害への備えを地域からはじめます。

会場)

- 一、ゼロメートル市街地における大規模水害への備えを地域からはじめます。

内田様)

- 一、お年寄りから子どもまで多世代の交流を進め、コミュニティの元気を再生します。

会場)

- 一、お年寄りから子どもまで多世代の交流を進め、コミュニティの元気を再生します。

石川)

- 一、行政を超えた、地域どうしの協力を進めます。

会場)

- 一、行政を超えた、地域どうしの協力を進めます。

石川・内田様・中川)

- 一、住民、地域の小中学校、PTA、NPO、企業、行政は、お互いに協力し、大規模水害に備える行動計画の具体化に向けた活動を行います。

会場)

- 一、住民、地域の小中学校、PTA、NPO、企業、行政は、お互いに協力し、大規模水害に備える行動計画の具体化に向けた活動を行います。

### 大規模水害への備えを通じたまちづくりアクション 新小岩宣言

- 一、ゼロメートル市街地における大規模水害への備えを地域からはじめます。
- 一、お年寄りから子どもまで多世代の交流をすすめ、コミュニティを元気に再生します。
- 一、行政を超えた、地域どうしの協力を進めます。
- 一、住民、地域の小中学校、PTA、NPO、企業、行政は、お互いに協力し、大規模水害に備える活動計画の具体化に向けた活動を行います。

司会進行)

ありがとうございました。これで長かったこのセッション終わりの頃になりましたが、最後に石川理事長から終わりのあいさつとさせていただきます。

## 8. 閉会挨拶

石川)

どうも長い間、ありがとうございました。ミャンマーで今、2万人ぐらいの方が亡くなっています。調査が進むとその数は、4万人ぐらいになるといわれています。あれは大きな水害だという事もあるのですが、それ以外に、やっぱり住んでいる方々が何も知らなかった、あるいは何も行動しなかった、住民に水害の危険性を教えなかったという事が大きな原因です。やはり事前の知識なり、イメージトレーニングなりをやっていれば、もっともっと助かった人



が大勢いるはずなんです。そういう意味では、今行った宣言のような活動を続ける事によって、皆さん方の命が助かるはずなんです。そして皆さん方だけではなくて、周りの人にもやりましょうと、輪を広げていく事によって、運命共同体に住んでいるみんなが助かるんです。今日を、一つの区切りとして皆さん方一人ひとりでは何も出来ませんが、でもその一人が始めないと何にも始まりませんから、自分の問題として抱えて、これから伝えていくという事の最初のスタートにさせていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。

**司会進行)**

どうもありがとうございました。これでシンポジウム「大規模水害に地域で備える」を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

**総合司会)**

長い時間ご苦勞様でございました。デイリー葛飾放送は、13日の火曜日、初回 18:00 から始まります。ご覧下さい。14日も再放送されます。

入口でプレゼントを受け取ってお帰りください。ありがとうございました。

以上

～編集～

加藤孝明（広域ゼロメートル市街地研究会・東京大学）

鴨川美紀（広域ゼロメートル市街地研究会）

渡邊喜代美（NPO「ア！安全・快適街づくり」・広域ゼロメートル市街地研究会）

塩崎由人（広域ゼロメートル市街地研究会・東京大学）

福嶋美智子（NPO「ア！安全・快適街づくり」）

檜林哲也（広域ゼロメートル市街地研究会・東京大学）

～編集後記～

事前の対策や災害時に必要な準備をするにあたり、改めて「想像する力」が大切と感じました。その一助に、被災体験談や地図等による被害の視覚化があり、防災訓練があると思います。常に考え、それらを継続し、行動に活かしていきたいです。（鴨川）

編集に携わることでシンポジウムの内容を改めて振り返ることになりましたが、これまでの取り組みが凝縮されていると感じました。できるだけ多くの方に読んでいただき、今後のさらなる活動へとつながればと思います。（塩崎）